◆技術交流事業

# 栽培養殖に関する技術交流

山　田　真　之

## 1．目的

本島中部東岸に位置する沖縄市漁協では中城湾を中心の沿岸漁業や奄美大島近海までに設置された浮き魚礁でのマグロ釣りや大東島近海のソデイカ釣りまで、広く漁船漁業が行われている。その一方で養殖業等は発展せず、わずか数名がモズク養殖を行っているだけである。

沖縄市漁協では青壮年部を解体し、新しく青年部だけで活動を再開し始めた。減少しつつある資源を採るだけでなく、つくり育てる漁業に取り組んでいくために、試験研究機関が集中して存在し、いろいろな施設も整備されている八重山に行き、現在の栽培・養殖漁業について視察を行い、その取り組みについて考える。

## 2．日程

平成16年９月17日

10：10　那覇発
11：05　石垣着
13：00　水産試験場八重山支場
14：30　八重山支場発
15：00　水産総合研究センター
　　八重山栽培漁業センター見学
16：30　センター発
17：00　登野城魚類養殖場見学
18：00　養殖場発
19：00　八重山漁協青壮年部との交流会

９月18日

９：00　シャコガイ養殖場視察
10：30　石垣市種苗供給施設見学
14：15　石垣発
15：05　那覇着解散

## 3．参加者

沖縄市漁協青年部

部長　小嶺　英仁
部員　小嶺　仁哉・與儀　久夫
　　小嶺　仁・名嘉真　肇

## 4．内容

①水産試験場八重山支場

水産試験場八重山支場では魚類２種と貝類３種の種苗生産の他、保護水面の調査等を行っている。単なる試験研究機関ではなく、種苗の量産業務も担った、水産試験場と栽培漁業センターの両方の機能を持った機関である。

種苗生産されている魚類にはヤイトハタとタマカイがあり、ヤイトハタは平成10年から量産が行われており、現在地元八重山で盛んに養殖が行われている。タマカイの方は平成13年に奄美大島から親魚が導入され、種苗量産の研究が行われている。またヒメジャコ、ヒレジャコ、ヒレナシジャコの３種のシャコガイ類も種苗生産され、こちらも地元石垣を中心に養殖が行われている。

名蔵湾や川平湾の保護水面の調査・管理の他、現在では既に種苗生産そのものはしていないものの夜光貝の放流効果調査も行われている。

**シャコガイ養殖について説明を受ける**

②水産総合研究センター八重山栽培漁業センター

こちらは以前までは社団法人日本栽培漁業協

会八重山事業場として運営されていたが、国の組織改編に伴い、組織と名称の変更が行われた。

職員の浅見氏より組織、施設及び現在の生産状況について教えていただき、その後施設見学を行った。現在ではアカウミガメ、スジアラ（あかじん）、シロクラベラ（まくぶ）、メガネモチノウオ（ひろさー）の種苗生産・放流が行われている。

**アカジンの親魚養成池**

③登野城地区魚類養殖場

登野城地区魚類養殖場は石垣市が事業主体となり平成６～９年にかけて沿岸漁場整備開発事業の漁場開発事業で13億円かけて約３万平米の範囲を消波堤を作り内側を堀込み、平成10年度に構造改善事業で浮き桟橋を造った人工的な魚類養殖場である。平成10年度より供用を開始し、水産試験場八重山支場で生産されたヤイトハタ（あーらみーばい）のみを29名が養殖している。

この養殖場は消波堤から延びた浮き桟橋を使用することで、船を使わずに生け簀までわたることが出来る。そのため漁業者は朝から夕方まで通常の漁を行いながら、夕方になると車で養殖場へ通い魚へ餌をあげることが出来る。また家族と協力しながらの養殖も出来る。漁場の面積が限られているため、現在部会員一人あたりの生け簀を４基までと制限し、新規参入も認めていない。一人あたりの生け簀数が制限されていることから、全漁業者兼業で養殖を行っている。

水試八重山支場から購入した種苗（１円／㎜）を１年半ほど養殖して、１～1.5kgサイズで県内スーパー等に販売をしている。単一魚種の養殖のため、漁協の担当が出荷先からの注文を受け、どの漁業者の魚を出すか割り振りをして共同出荷を行っている。

**登野城地区養殖場**

④シャコガイ養殖場

池田元氏は平成８年から水試八重山支場と協力してシャコガイ類の試験養殖に取り組んできた。石垣港の南に広がる礁湖（イノー）の池田氏所有の小型定置網のすぐ側でシャコガイのケージ式養殖を行っている。現在は1.5m角のケージを30基以上保有し、ヒレジャコとヒレナシジャコの養殖を行っている。

ヒレジャコとヒレナシジャコは水産試験場八重山支場で種苗生産された種苗を１個５円で購入し、石垣市の種苗供給施設で数ヶ月中間育成した後、ケージへ移す。シャコガイが小さいうちは食害対策のため目の細かいケージで蓋をして養殖を行い、大きく成長した後はケージ外の海底に置いて、モズク網で天井網をして養殖を行っている。池田氏の意見としては中間育成は重要で、種苗のまま沖だしすると生残率は低いとのことであった。

販売は個人で行っており、セリへの出荷はしていない。客へのお土産としてのからの需要も高い。

養殖している上での最大の問題は人災（盗難）であり、池田氏も過去に何度も盗難に遭い、保安庁等への届け出も行い監視を強めているとのことであった。

シャコガイケージ式養殖

シャコガイ地蒔き式養殖

⑤石垣市種苗供給施設

石垣市種苗供給施設は石垣市が事業主体となって整備した施設で、現在ではモズクの種付けやシャコガイ類の中間育成、海ぶどうの養殖などが行われている。池田氏の案内でシャコガイ類の中間育成を見学させて頂いた。

シャコガイ種苗の陸上での中間育成

海ぶどうの養殖は八重山漁協内に八重山漁業協同組合海ぶどう生産部会を組織して現在７名が養殖に取り組んでいる。部会員の仲田森浩氏に海ぶどうについて説明をして頂いた。なお、仲田氏は夏場のかご網、冬場の小型定置網に加え、魚類養殖とサバニクルーズという観光漁業にも取り組んでいる。海ぶどうの養殖は当初石垣市水産課が積極的に試験等導入を行ってきた。元々魚類の中間育成用のタンクを使用して養殖しているため使い勝手が悪く、またタンクの数も他の業種との競合により希望通り使えるわけではないので今後施設整備も含めた独自の展開が必要になる。

海ぶどう養殖の説明を受ける

## ５．所感

県に入庁当初八重山支庁にて勤務し３年前まで石垣にいたため、今回久々にいろいろな施設を漁業者と見学して回ってみたが、八重山は漁業に関して大変恵まれていると強く感じた。八重山で主として養殖されているヤイトハタやシャコガイは島内で種苗生産されており、輸送に関するストレス等も少なく、また養殖環境（施設や海域特性）も十分に整っている。

今回沖縄市の青年部の引率ということで八重山を訪れたわけだが、沖縄市の現状を考えると八重山で見たものをそのまま導入できないことがわかる。今後漁船漁業だけでは生活の安定化が図れないと思われるだけに、今回の視察を参考に青年部と栽培・養殖漁業について出来ることから取り組んでいきたいと思う。